

論 文 要 旨

中国南北朝墓誌の比較研究

－墓誌の成立と変遷－

2024年11月

城西国際大学大学院

人文科学研究科比較文化専攻

馬 賽

本論文は、歴史的な視点に基づく中国の南朝と北朝の墓誌に関する比較研究である。墓誌は、中国古代における喪葬制度の持続的発展の産物の一つで、定式的な外形と専門的な文体からなり、主に墓主等の姓名や卒年・埋葬年、生涯事績等を記す。南北朝時代の墓誌は、中国墓誌の変遷過程における定型形成期にあり、この段階の墓誌を研究対象として、その形式や内容等の面からその変遷や時代的な特徴を析出することは、中国古代墓誌全体の変遷脈絡を把握する上で欠かせないと考える。

南朝・北朝墓誌の比較研究という本論文の構想のきっかけは、梶山智史（以下、梶山）の「北魏における墓誌銘の出現」（2016）である。この中で梶山は、どのようにして北魏で墓誌が出現したか、という問題を主に論じた。筆者が注目したのは、その分析過程における「宋とそれに続く齊・梁・陳の南朝時代の墓誌銘は現存する実例が非常に少ない」ことと、「墓誌銘が暴発的に盛行したのは、むしろ南朝に対峙していた北朝においてであった。北朝の墓誌銘は質量共に南朝とは比べものにならないほど豊富な事例が現存しており…」という2点である。梶山は自身の分析を通して、南朝墓誌は墓主について記録する諸要素を完備していたが、北朝の北魏は墓誌の様式を自ら独創したわけではなく、南朝から移植されたものとみるのが自然であろう、と結論づけた。いわゆる墓誌の様式は、北魏で盛行する半世紀ほど前には南朝で既に成立していたにもかかわらず、なぜ北朝墓誌の製作点数（出土点数）は、南朝の数十倍にもなり得たのであろうか。

この問題意識をもって、墓誌に関する先行研究を読み進めていくうちに、このような不均衡さについて深く論じ説明づけた論考は、ほとんどみられないことを知るに至った。そこで、この点をさらに深掘りすべく、北朝・南朝墓誌に関する研究に取り組んできた。

本論文は7章から構成されており、各々の概要は以下の通りである。

第1章では、南北朝時代の墓誌に焦点を当てつつ、これまでの墓誌に関する研究をまとめた。墓誌研究の主題は、大きく分けると主に墓誌の起源、墓誌の刻法、刻文に対する書道の検討、誌文の考釈、誌文内容から読み解く婚姻関係等がある。これらの研究成果は、北朝・南朝墓誌をより深く理解するための基盤をなすことは間違いない。しかしながら、これまでの研究成果は墓誌の1要素、あるいは2,3の要素に注目して考察を加えたものが多く、墓誌のすべての要素を統合的に分析し、考究した論文はきわめて限られる。また、墓誌は北朝よりも先に南朝で成立したとはいえ、南朝の墓誌点数は北朝の7%にも満たない。この点に言及した論文は少なくないが、墓誌点数が多い北朝墓誌の研究成果との関連づけを図りながら、南北双方の墓誌についての理解を総合的に深めた比較研究は、ほとんどみられない。

このような研究史の振り返りを踏まえ、まず墓誌に関する全要素を客観的に把握し、統計的視点も併せて墓誌の定型化への道筋を明らかにすること、また、魏晋南北朝の歴史背景と墓葬の変遷を関連づけつつ、北朝墓誌と南朝墓誌の異同を明確にし、双方の変遷の比較検討に基づき、点数較差の背景を究明にすることを旨とし、自分の研究目的と研究課題として提示した。

第2章では、まず墓誌を定義づけ、次に、これまでに集積されてきた墓誌資料、及び墓誌の出土状況を具体的にまとめた。本論文では独自に、「墓誌」は(1)墓に埋置されたもの、(2)被葬者の身分や郷里、享年、卒年等の個人情報を書いたもの、という要件を同時に満たす銘刻である、と定めた。また、先人による墓誌変遷の時代区分を援用しつつ、(1)西晋代以前(-265)、(2)西晋代から東晋・五胡十六国時代まで(266-420頃)、(3)南北朝時代(420-581)と、各段階をさらに細分化した。続いて、これまでの墓誌集成資料を紹介した上で、2020年6月までに出土した墓誌資料を組み入れ、本論文で検討対象とする墓誌資料の全体像を概観した。

第3章では、第2章でみた墓誌の出土状況を踏まえつつ、西晋以前、東晋・南朝、五胡十六国・北朝という、それぞれの時代ごとにみた墓誌様式についてまとめた。そして、墓誌の大きさや様式、材質はもとより、誌文の書式や内容も加えて、これらの変化の実体、あるいは変化の方向性を捉えることで、当該時代の墓誌の全体像を具体的に示した。

全体としてみれば、東晋代の磚製墓誌以外は主に石製である。そして、西晋代や北魏代493年以前の碑形墓誌を除くと、長方形あるいは正方形が主流をなす。誌石表面に界格(割付用の線刻)を施した墓誌は、西晋・東晋代では半数に満たないが、北朝では大半を占める。また、蓋を伴う墓誌は、主に北朝、とりわけ北魏代494年以後に製作されたものである。誌文に関しては、西晋以前の墓誌には墓碑の碑文の流れを看取したが、東晋代に入ると内容はきわめて簡素なものとなった。そして、南朝の宋・齊・梁・陳の各王朝、また北魏代494年以降では、誌文構造は再び碑文のスタイルに戻り、その記載内容も、さらに詳細かつ豊富なものとなる。そして、総合的な視点からみると、誌文の書体は隸書から楷書へと変化し、蓋の刻字書体は楷書から篆書へと変化する。また、従来よりも女性墓主の墓誌が目につくようになる。

第4章では、まず、第3章の後漢・晋・南北朝時代の墓誌の全体像を踏まえ、特に、(1)西晋代以前の墓誌と東晋代の墓誌との異同、(2)南朝前半の墓誌と北魏の墓誌との異同、(3)東晋・南朝墓誌にみられる異同、(4)五胡十六国・北朝墓誌にみられる異同、そして(5)北朝墓誌と南朝墓誌の異同について、具体的な整理を試み、複数の時間軸に基づく詳細な検討を重ねた。第一に西晋代以前(漢・魏・西晋代)から東晋代、及び五胡十六国・北朝初期段階(五胡十六国時代から北魏代493年以前)にかけての変化の方向性、第二に東晋・南朝(宋・齊・梁・陳)における変化の方向性、第三に五胡十六国・北朝(北魏代494年の以前と以後)における変化の方向性を明らかにした。これらは、同一空間における変化を捉える視点である。さらに加えて、第四に東晋・南朝前半(宋・齊)と五胡十六国・北朝前半(北魏代493年以前)、そして第五に南朝後半(梁・陳)と北朝後半(北魏代494年以降)という、時期的にほぼ並行する南北間の相違を抽出、整理した。こちらは、同時代的な水平方向の視点である。注目した点は、「墓誌」という用語の使用状況、墓誌の材質や形状、文字数、書体、誌文構造、記載内容、定型句あるいは定式的表現等である。

第5章では、第4章の比較分析に基づき、墓誌に関する認識が深化されたことを踏まえ、その歴史的な背景について考究した。魏晋南北朝時代は、中国の歴史上、特記すべき大分裂の時代であり、民族大融合も一気に進んだ時代でもある。この時代を巨視的に捉えると、2度にわたる大分裂と統合が繰り返されたことになる。本章では、このような激動の時代における各国の盛衰を整理しつつ、南北間での人の往来や交流、漢人官僚登用等を踏まえ、禁碑令による「薄葬」思想拡散のもと、墓誌を埋置する習慣がどのように変化しながらに普及したかをみた。さらに、北魏・平城時代の墓誌を検討しつつ、潜在化していた皇権確立への動きについて論じた。

前章にて、墓誌の原型は漢・魏代には既にみられることを確認した。そして、魏・晋代における「薄葬」と「禁碑」を承けて、墓誌の変遷及び普及が促進されたのである。南北大分裂以後、このような墓室内に墓誌を埋置する習慣は、東晋・南朝と五胡十六国・北朝へと継承された。そして、南北それぞれにおいて変遷を遂げ、初源的な碑形墓誌は方形墓誌へ、さらに蓋が付け加えられるようになり、よく知られる墓誌銘として普及していく。早期段階の墓誌は、その記載内容や様式等はごく簡素なものであったが、次第に変遷・普及するにつれて、その記載内容は複雑なものとなり、製作水準もより精美なものが求められた。

続く東晋・南朝墓誌の点数は、五胡十六国・北朝と比べて極端に少ないため、第6章では、北朝墓誌を主体とし、並行期の南朝墓誌も視野に入れつつ、墓主の身分と誌石の大きさ、文字数、施文等との関係性についての分析を試みた。具体的な考察では、墓主の地位身分と墓主の性別に着目した。墓主の地位身分に関しては、主に墓主が官職・爵位の有無に注目し、誌石の大きさや記載内容（文字数）、様式との相関について分析した。墓主の性別に関しては、男性墓誌と女性墓誌との異同について検討した。以上の比較検討から得られた知見をまとめると、以下のようなことになる。

- ①地位身分を有する墓主は墓誌を製作する傾向があり、北魏代になると高官の方が大きな墓誌を製作する傾向性が強くなる。墓誌の仕上がりも、より精美なものとなる。
- ②官爵が高位であるほど誌石の大きさに幅があるが、誌石の大きさは官爵の品秩に即す等級や規律性があると想定することが難しい。
- ③墓主の官爵が高位である墓誌の文字数は、記載内容が豊富であることから一般的には多いものの、例外もみられる。
- ④誌石の大きさは、墓主の地位身分以上に、誌文の文字数に直接関係する。原則として、文字数が多ければ誌石は大きくなるが、一文字の大きさとも関係するので、文字数の多さと誌石の大きさは必ずしも整合するわけではない。
- ⑤施文された墓誌は高位な者、立派な家柄の出である者に偏る傾向がある。
- ⑥南朝墓誌と北朝墓誌の比較を踏まえ、さらに以下の3点に留意したい。

a 男性墓主の場合

東晋代と五胡十六国時代では全体的に小ぶりの墓誌を製作し、南朝と北魏以後の墓誌は、

墓主の地位身分が低位になるにつれて小ぶりになる傾向が顕著になる。

b 女性墓主の場合

北朝では、女性墓主の誌石の大きさは男性墓主ほど差がみられないのに対し、南朝では北朝よりも地位身分の較差が表われたようである。そして、南北間では、南朝墓誌の方が北朝よりも小ぶりの傾向にある。

c 男性墓主と女性墓主の相違

北朝では女性墓主の誌石は男性よりもやや小ぶりであるが、南朝ではこのような傾向はみられない。

以上、墓誌の製作は普及してきたと言える。時代の発展につれて、点数の増加、地位身分にみた誌石の大きさ、記述内容の豊富、また精美な製作等は、死者を埋葬する際に、墓中に墓誌を埋置するのは次第に慣習になることを意味すると考えられる。

最初に気づいたように、確認された南北双方墓誌の事例数には大きな較差が生じた。第7章では、南北双方の墓誌の変遷を比較した上で、点数の較差が著しくなった背景について検討した。第5章の歴史背景に対する検討をふまえ、いくつかの仮説を提示した。

- ①北朝墓誌の盛行は、政権の安定、及び北魏孝文帝の漢化政策とは不可分の関係にある。
- ②北朝の盛行に対して南朝は、つねに政局が不安定で埋葬の簡素化がはかられ、墓誌製作も省略された可能性がある。
- ③漢文化の正統と自認した南朝は、魏晉の禁碑令と薄葬習慣を意識的に継承した可能性もある。
- ④東晋代の名門貴族等にとって、国土回復志向が保持されているうちは本格的な埋葬行為は控えるべきこととされ、結果的に墓誌点数が限定的なものになった可能性がある。
- ⑤江南伝来の埋葬慣習の影響を受け、墓誌の普及が促進されなかった可能性がある。
- ⑥江南の酸性土壌により、墓誌が判読できないほどの影響を受けた可能性がある。

最後の終わりの部分では、本論文を要約しつつ、今後に向けたさらなる課題を提示した。これらを整理すると、以下ようになる。

- ①墓誌製作の際に、墓主の生涯や履歴等を記す「序」と、墓主の徳行や功績等を讃頌する「銘辞」、その他の構成比率に関する全般的な把握。
- ②墓主一人ひとりの脈絡を踏まえた、墓誌製作に関する規範の探求。
- ③多くの空白を残した墓誌が製作された背景の探求。
- ④墓誌の撰人、書人及び建造人（製作人）等についての探求。
- ⑤同一氏族内にみる相違や、氏族間の繋がりについての探求。
- ⑥新たな墓誌を集成資料に加え、墓誌データベースの継続的に更新。